

対馬でトリアスロンがしてみたい

須藤, 竜之介

九州大学大学院システム生命科学府 : 一貫制博士課程5年

<https://doi.org/10.15017/4400001>

出版情報 : 決断科学. 7, pp.23-29, 2020-03-23. Institute of Decision Science for a Sustainable Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

対馬でトライアスロンがしてみたい

須藤竜之介 認知神経科学

背景

本論考は2016年からはじまった自主的活動、通称「対馬トライアスロン実行委員会」の活動の記録である。本自主的活動では、対馬における新規イベントの創出を目指し、その実現可能性を検討するための試みが行われてきた。本活動は正式には2016年度に「観光地における集客力の高い地域イベントを考える」、2017年度では「地域資源を取り入れた新たな体験型イベントの考案および実現可能性の検討」という題目でプログラム内の助成を受けて行われた。本活動は須藤竜之介と東隆康の2人によって2016年から始められ、2017年には久保裕貴、高田亜沙里、徳永翔太の3人が加わった。

本活動の発端となったのは統治モジュールの対馬実習であった。2016年度、統治モジュールは実習の一環として上対馬高校の二年生の総合学習授業の支援を行なった。具体的には、「島の宝プロジェクト」と呼ばれるフィールドワーク等を通して地元上対馬の魅力や課題を探る総合学習のプログラムが、九州大学、対馬市商工会上対馬支所、対馬市の協力のもと進められた。この総合学習では、班ごとに決めたテーマをもとに調査・探求活動を行う。高校生のフィールドワークや成果報告のサポートとして、各班の活動に統治モジュールの教員・学生が同行した。

本活動の立案者である須藤と東は、この2016年度の授業で交流をテーマとする班に同行し、そこで交流イベントの実行委員会や参加団体、レンタルサイクルやフェリーターミナルのスタッフ等に国内外の交流事業についてのヒアリングを行なった。その中でも特に印象深かったのが上対馬の一大イベント国境マラソンであった。国境マラソンとは、「日本一過酷なハーフマラソン」の異名をもち、1,000人以上の参加者が集まる競技イベントである。国境の名称からも伺えるように韓国との交流をその目的の一つとして始まったイベントであり、実際に韓国から多くの参加者が訪れ、大会は2019年度で23回を迎えている。

2016年次の聞き取りから、国境マラソンは上対馬におけるビッグコンテンツである一方で、参加者の多くが日帰りのため経済効果が小さい、イベントを通して対馬の魅力を伝えきれておらずリピーターを十分に獲得できていない、競技型イベントゆえにイベントを通じた交流が起こりにくい、20回を迎えてややイベントがマンネリ化してきている、といった課題もあることがわかった。これらの聞き取りを通して、我々は国境マラソンを発展させた一つの可能性としてトライアスロンイベントの開催を考えた。

このアイデアに至った理由としては、対馬には多くの美しい海と浜辺があり、急勾配の傾斜を有する公道などもあったため、トライアスロンは対馬の資源を有効に活用できる競技と思われたからである。また、競技時間が長くなるためスケジューリングによっては宿泊を前提としたパッケージを組むことが可能であり、観光収益を向上させることが可能という点にも着目した。この対馬実習での経験から着想を得て、対馬での新規イベントを考案することで地域のニーズに基づく課題の解決を目指す本自主的活動が発足した。

これまでの活動

2016年度は「実際に対馬でトライアスロンを行うことはできるのか」をテーマにその可能性を検証する活動を行なった。実際に自分たちで対馬を訪問し、トライアスロンのコースになりうる海水浴場と公道の視察、試



図1 2016年度国境マラソンに集う猛者たち。すべてはここからはじまった。

走等を行い、トライアスロンイベントのパッケージ化を試みた。もちろん国境マラソンも走った(図1)。この年の活動で明らかになったのは、対馬におけるトライアスロンコースの設計は十分に可能であるということである。その一方で、新規イベントの交通規制の申請の難しさや、ボランティアスタッフの確保をはじめとしたトライアスロンそのものではなく、イベントの運営に関する多くの課題があることも明らかになった。

そこで、上記の点を念頭に置いた対馬における実現可能性の高いトライアスロンのパッケージとして、我々はセルフ・トライアスロンシステムを考案した(須藤・東, 2017)。セルフ・トライアスロンシステムとは、既存の水泳・自転車・マラソンに関するいずれかの競技型イベントに参加し、トライアスロンに不足する種目を自主的に行うことで、結果的にトライアスロンの遂行ができる方法である。このシステムを用いることで、公的なトライアスロンイベントが開催されていない地域でも競技を実施できることから、競技を小規模かつ有志で開催する場合には非常に有効な方法であるといえる。

2017年度は実際に上対馬で行われる国境マラソンと、上対馬から厳原までを縦断する国境サイクリングの二つのイベントへの参加を通してセルフ・トライアスロンシステムによるトライアスロンの実施を試みた。国境マラソンでは、無事に競技時間中にすべての種目を終了し、同日のフェリーを利用することも可能であったことから、コンパクトなスケジュールで実施ができ実現可能性が高いと思われる。一方、国境サイクリングでは開催時期が秋のため水温の問題でスイムが実施できなかった。しかしながら、バイク・マラソンについては完遂することができたため、トライアスロンコースの設計としては問題がないものと思われる。この実践によって上対馬エリアで完結したコース、上対馬から厳原を縦断するコースなど、複数のコースを立案することができた。とりわけ国境マラソンとのパッケージはすでに開催されているイベントの延長になるので、交通規制やボランティアの問題も新規に行うより比較的小さく、実現可能性が高いものと思われる。

2年目の活動によって島内でトライアスロンイベントを行うことの実現可能性や問題の多くは検討されたものの、その一方で他の地域とのイベントの差別化の課題が残された。対馬をはじめとする長崎の離島では、すでに五島がトライアスロンを開催しており、壱岐ではロードレースが開催されている。そのため、参加者が他の地域ではなく対馬にトライアスロンをしにくる理由となるような魅力が必要である。そこで、対馬独自の文化を競技種目として活用する案を着想し、ご当地トライアスロンの開発を試みた。

具体的には、対馬の伝統的な船の一つである櫓舟を用いた競争「舟グロー」と、対馬を中心に飼育されてきた日本在来馬の一種「対州馬」の活用である。トライアスロンの種目でスイムの部分を舟グローに、バイクの部分を対州馬に変えることで、競技を対馬のご当地トライアスロンへとアップデートする。我々はこれをツシマスロンと名付けた。この地域の文化資源を活用して新たなイベントを創出する試みは外部からも評価され、対馬市学術研究等奨励事業補助の採択に至っている。これにより実践活動に加えて研究活動としてもこのプロジェクトを進めることが可能となり、

実際に舟グローの保存会や対州馬の関係者への聞き取り調査を行い、その実現可能性を検討することができた。

これらの文化資源は近年では活用の頻度が激減しており、今後の存続について関係者は少なからず危機感を抱いていた。舟グローはかつて島内の各地区で大会が行われていたが、現在は全島で年に二回のみしか行われていない。対州馬もかつての農耕や物資運搬での利用がなくなったこともあり、島内の頭数がかかなり少ない状態になっている。本活動が提案するイベントは、こうした衰退の危機にある文化資源に対して持続可能性の向上に貢献する一つのモデルになりうるものといえるだろう。実現に向けた運営上の課題は残されているが、競技そのものとしてはある程度の意義と実現可能性を備えたものをデザインすることができたと思われる。

2018年度以降も本活動は有志でトライアスロン実現に向けた実践を継続している。2018年には実際に上対馬での舟グロー大会への参加や対州馬の試乗等を通じた調査を行なった。また、2019年現在も国境マラソンに参加し続けている。こうした実践活動と並行してこれまでの蓄積を活かした研究活動も展開しはじめている。特に2018年度も対馬市の研究助成に採択されたことで、地域行事および文化の持続可能性やその地域への貢献に関する研究としてこれまで以上に活動規模の広がりをみせている。その延長として2019年度には研究調査のための自主的活動予算を獲得し、地域住民が抱く一般的な行事観とは何か、そして地域行事は現代社会に本当に必要であるのか、という野心的なテーマの研究にも挑戦している。しかし、当初の目的であったイベントの実装については提案から先に進めていない状態であり、今後の大きな課題となっている。

展望

本論考では、対馬でのトライアスロンイベント開催を目指した自主的活動のこれまでのあゆみを振り返った。本活動は、モジュールでの実習を通して発見された課題をより深掘りしていくことで一つの解決方法の提案を行っており、ボトムアップ型のプロジェクトといえるだろう。毎年継続

して活動を積み上げていき、これまでのつながりを活かしながらプロジェクトを段階ごとに発展させている点が本活動の特色である。また、外部助成の獲得など、プログラム外からの評価を得ていることも強みである。特に2017年度から2年に渡り外部助成を得たことで、プログラム予算に依存しない自立した活動を展開している本活動の持続可能性の高さは、他の自主的活動にはみられない点である。加えて、本自主的活動は成果発信として毎年対馬学フォーラムでの学会発表を行っており（須藤・東，2016，2017；須藤・城田，2018，2019）、2017年度のフォーラムでは大会優秀賞を獲得するなど、地域住民からの関心や期待も大きい。

実践に基づく提案から先に展開できていない現状には不満がある。しかしながら、数年に渡り一つの目的のもと現場での実践を続けてきた本活動の取り組みは、決断科学プログラムが目指す現場での問題解決の実装のための示唆に富むものだと確信している。もちろん、今後も本活動は継続していくので、さらなる発展と活躍にご期待いただきたい。

あなたも一緒に走りませんか？

謝辞

本活動の実践にあたって、顧問として活動の全面的なサポートをしてくださった統治モジュール教員の花松泰倫先生（現九州国際大学）に感謝申し上げます。また、調査先への取り次ぎ等、対馬での活動をサポートくださった対馬市しまづくり推進部しまの力創生課の前田剛氏、城田智広氏（現慶應義塾大学大学院）に感謝申し上げます。本活動の一部は、2018年度および2017年度対馬市学術研究等奨励事業補助の助成を受けて実施されました。

参考文献

- ・須藤・城田（2019）対馬における行事の類型化の試み—運営形態と機能性の観点から—，対馬学フォーラム 2019 プログラム・発表要旨集，44.
- ・須藤・城田（2018）地域イベントは私たちの暮らしにどのように役立っているのか？—地域行事の類型化と機能性の検討に向けて—，対馬学フォーラム 2018 プログラム・発表要旨集，51.
- ・須藤・東（2017）対馬でトライアスロンはできるのか？—セルフ・トライアスロンシステムを用いたご当地トライアスロンイベントの提案—，対馬学フォーラム 2017 プログラム・発表要旨集，56.
- ・須藤・東（2016）対馬トライアスロンへの挑戦—伝説の第 0 回を目指して—，対馬学フォーラム 2016 プログラム・発表要旨集，66.



須藤竜之介 すどう りゅうのすけ

九州大学大学院システム生命科学府 一貫制博士課程 5 年

持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム 健康・統治・環境モジュール。1989 年東京都生まれ。実は 0 歳から水泳に通い、小学校時代にはトライアスロンスクールへ通っていたことがある。人生、何が役に立つかはわからないもの。